

創発 Mail Magazine

創発は“インキュベーション”のプロ集団。～問題解決のための新しい戦略・進化～

当メールマガジンは、日本総研/創発戦略センターの研究者と名刺交換させていただいた方に配信させていただいています。>> [登録解除はこちら](#)

当メールマガジンは、HTML形式で配信させていただいております。うまく表示されない方は>> [こちらからご覧ください](#)

| [日本総研/創発戦略センター](#) | [研究員紹介](#) | [セミナー・イベント](#) | [書籍](#) | [掲載情報](#) |



創発戦略センター
所長
[井熊均](#)

IKUMA Message

... from 創発戦略センター所長 井熊均

有望な市場をスライスして国境を取り払う

年度末から年度明けにかけて、タイ、ベトナム、中国は北京、広州と忙しく飛び歩いてきました。それだけ、この地域にはいろいろな事業の可能性があるということなのですが、一筋縄ではいかない面も出てきます。

中国では、日中関係が改善しない中、官庁相手でも民間企業相手でも、現場は現場で物事を進めて行こうというコンセンサスがあります。一方で、話が進むと、日本と協働することに対してどこからか懸念の声が聞こえてくる、という政治リスクを常に意識しなくてはなりません。中国に抜かれたとはいえ、世界第三位の経済力を持つ日本の企業にとって、中国市場抜きでグローバルな成長を考えるとできないので、当分の間こうしたストレスを戦わなくてはなりません。

東南アジアは多くの日本企業が注目する市場ですが、一つ一つの国の経済規模は日本の大きな県程度しかありません。日本企業が有望市場とするためには、ASEAN全体を見据えなくてはならないのですが、国レベルでも国の中でもまだら模様です。タイのようにグローバルなサプライチェーンの中で存在感を示す国もあれば、ミャンマーのような未開の国もあります。そのタイを見ても、バンコク周辺の日本以上の一極集中が改善されないですし、新興国でありながら労働人口が頭打ちの時代になっています。どこの国でも貧富の差は広がる一方です。ベトナムでは富裕層の子息が行き交う高級住宅街から10キロメートルも離れると昔ながらの農村が広がっています。

かつてのアメリカや尖閣前の中国のように、もはや日本の成長を支えるに足る大市場は存在しません。それでも、まだら模様の中で確実に拡大する市場があります。それを手にするためには、有望な市場をスライスして国境を取り払うような切り口と展開力が必要なのでしょう。

[Ikuma's Photo]

ホーチミンから20キロメートルほど離れたところにあるゴルフ場のクラブハウスから撮った写真です。クラブハウスは日本でも滅多にない豪華なもので、遠景にはホーチミンの高層ビルが見えます。その間を埋めるのは、ジャングルと農地というベトナムのコントラストです。

■ 書籍 [各書籍情報はこちら](#)

「『自動運転』が拓く巨大市場2020年本格化するスマートモビリティビジネスの行方」日刊工業新聞社

「2020年、電力大再編 電力改革で変貌する巨大市場」日刊工業新聞社

「性能限界」(日刊工業新聞社)

「電力不足時代の企業のエネルギー戦略」(中央経済社)

「図解 グローバル農業ビジネス」(日刊工業新聞社)

「次世代エネルギーの最終戦略 使う側から変える未来」(東洋経済新報社)

「なぜ、日本の水ビジネスは世界で勝てないのか」(日刊工業新聞社)

「中国環境都市 中国の環境産業戦略とエコシティビジネス」(日刊工業新聞社)

「図解 次世代農業ビジネス—逆境をチャンスに変える新たな農業モデル」(日刊工業新聞社)

「甦る農業 〜セミプレミアム農産物と流通改革が農業を救う〜」(学陽書房)

「グリーン・ニューディールで始まるインフラ大転換」(日刊工業新聞社)

「図解 企業のための環境問題 Ver.3」(東洋経済新報社)

「自治体再生 資産リストラで財政破綻を回避せよ」(学陽書房)

「よくわかる最新バイオ燃料の基本と仕組み」(秀和システム)

「ポスト京都時代のエネルギーシステム 分散型電源と再生可能エネルギー」(北星堂書店)

「だから日本の新エネルギーはうまくいかない!」(日刊工業新聞社)

「中国エネルギービジネス」(日刊工業新聞社)

「プロフェッショナル・サラリーマン」(水曜社)

「図解でわかる 京都議定書で加速されるエネルギービジネス」(日刊工業新聞社)

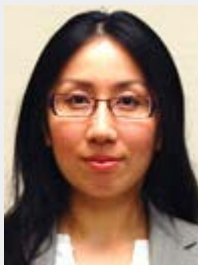
「実践的事業者評価による自治体の調達革命」(ぎょうせい)

「図解よくわかるバイオエネルギー」(日刊工業新聞社、編著)

「燃料電池ビジネスの本命“住宅市場”を狙え!」(日刊工業新聞社、編著)

「プロジェクトマネジメントの考え方 進め方」(オーエス出版社)

■ [Ikuma Message](#) [バックナンバー](#)



創発戦略センター
マネジャー
[渡辺 珠子](#)

創発eyes

... 研究員による創発最前線

“簡素な”イノベーションから再考する

2012年、ネスタという英国の財団がインドにおける「“簡素な”イノベーション」に関するレポートを発表した。「簡素な」イノベーション (frugal innovation) とは、その土地で手に入る範囲内での資材・情報(マーケット情報など)・資金などを活用し、現地インフラや顧客の生活実態に見合った技術や、ノウハウと組み合わせることでコストを最小限に抑え、身近な社会的課題を解決するためのイノベーションを意味する。このイノベーションが興味深いのは、単に機能(function)をそぎ落とした低価格の商品やサービスは対象でなく、低価格ではありながら最新の科学(science)と、技術(technology)を組み合わせた性能(performance)の高いものであり、かつ多くの人が簡単に長く使えることである。

“簡素な”イノベーションは、インドを含めて、新興国の地方・農村市場向けの商品やサービスに見られることが多い。代表例が義足のジャイプール・フットである。1960年代後半に、廃タイヤからのくずゴムや木材などを使った義足を開発し、その当時にインドで手に入る義足のわずか270分の1程度の価格(45ドル程度)で提供したことから始まる。現在は、技術者約50人、医師3人を抱え、年間2万足以上を生産している。特徴的なのは、低コストにも関わらず本物の足のような外観であり、膝の曲げ伸ばし、足を組んで座る、また急斜面もしっかりと歩くことができるなど、見た目だけでなく機能面でも患者のニーズを充足していることである。ジャイプール・フットが低コストを実現できたのは、先進国の義足開発とは異なり、製品開発への投入費用が極めて少なく、高い価格を設定しなくても、コストが回収可能であることが大きな要因だと考えられる。

通常このような“簡易な”イノベーションの事例は、日本企業にとっては関心外であることが多い。日本企業は「自分たちとは関係のない、現地のボランティアベースのビジネスだろう」、「イノベーションというのは自社内で作り上げることが大事」。こういう「声」が良く聞こえてくる。しかし、ジャイプール・フットにはダウ・ケミカル社が素材技術開発で協力している。ゼネラル・エレクトリック社はインドの乳幼児向け保育器ビジネスに出資し、かつ技術提供も行っている。

いる。世界の大企業は現地で生み出された“簡易な”イノベーションを取り込みながら、現地に見合った技術を低コストで開発する能力や、ビジネスモデル構築の発想力といった、新興国市場攻略に必要な力をつけることが狙いだ。もちろん、現地企業と共にビジネスを育てた上で買収し、自らが当該市場で成長するといった戦略を持つ企業もある。イノベーション創出が求められる昨今、新興国や途上国で生まれる“簡易な”イノベーションを企業のビジネスに取り込む視点も必要ではないだろうか。



創発戦略センター
ESGアナリスト
[長谷直子](#)

研究員エッセイ

初めてのベトナム旅行

先日、ベトナムの首都ハノイを初めて訪れました。とても楽しい旅でしたが、実際に訪れてみて現地の大気汚染の深刻さに驚かされました。

ベトナムでは地下鉄や鉄道網はまだ発達していないため、移動手段はバイクが中心です。街の大通りの交差点ではバイクの大群が行き交い、ベトナムを初めて訪れる人はまずその交通量の多さに圧倒されると言います。さらにこれらの車やバイクから出る排気ガスの多さは想像をはるかに超えるものでした。街ではマスクをしてバイクに乗る人たちが多く見られます。PM2.5（微小粒子状物質）の大気への拡散状況をマップに表示したものがインターネット上で公開されていますが、ベトナムは常に濃度が高い状態です。増え続ける車やバイクからの排気ガスも汚染原因の一つになっているかもしれません。また、ベトナムでは工場や石炭火力発電所などの建設が増えており、工場などから排出される有害大気物質による大気汚染も深刻化しているそうです。こうした大気汚染物質に加えて、実際に街を歩くと道路がきちんと整備されていない所が多く、土埃なども混じって30メートル先ですらクリアに見えないことがありました。

ベトナムでは古くからの文化やアジアらしい街並も残されており、ベトナム料理もおいしく、ぜひまた訪れたいと思いましたが、大気汚染の深刻さに驚いたのも事実です。経済発展の著しい国の一つですが、今後、観光客を呼び込むためにも環境問題への対応を進めることが同じくらい重要ではないかと感じた旅でした。

写真は、ハノイ市内のある朝の空の様子です。この日は特に見晴らしが悪い日でしたが、天候が曇りだったわけではありません。住民の話によると、晴れ渡った青い空が見える日はないそうです。

編集後記

5月1日はフランスで「スズランの日」と呼ばれ、愛する人や大切な人に、スズランを贈る習慣があるそうです。

すずらの花言葉は「幸せの再来」で贈られた人は幸せになれると言われています。

日頃の感謝を込めて、大切な人にスズランをプレゼントをしてみたいかがでしょうか。

※記事は執筆者の個人的見解であり、
日本総研の公式見解を示すものではありません。

株式会社日本総合研究所 創発戦略センター Mail Magazine（隔週火曜配信）

このメールは創発戦略センターメールマガジンにご登録いただいた方、シンポジウム・セミナーなどのご参加いただきました方、また研究員と名刺交換した方に配信させていただいております。

【発行】 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター

【編集】 株式会社日本総合研究所 創発戦略センター編集部

〒141-0022 東京都品川区東五反田2丁目18番1号

大崎フォレストビルディング

TEL：03-6833-6400 FAX：03-6833-9479

<配信中止・配信先変更・配信形式変更>

<http://www.jri.co.jp/company/business/incubation/mailmagazine/>

